
GRAND FORT

NG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G R A N D F O R T

【Nコード】

N 8 8 0 9 G

【作者名】

N G

【あらすじ】

十七歳の少女ジャネットは祖父と共に、荒廃しきつた世界で「グランドフォート」と呼ばれる小型移動要塞を駆って古代の遺跡の発掘、ロストテクノロジーの転売をして生計を立てながら、失踪した母の行方を追っている。

序

滅びは突然だった。

眩い光と共に、地は萎び天は澱んだ。空気は腐臭を放ち、水は汚濁した。

大地は、瞬く間に荒廃していった。川が消え、むき出しの地面は輝われて脆く崩れる。

木々は刈り取られるように次々と姿を消し、緑が消えて只地平線が残った。

動物もまた森の消失とともに姿を消し、後には骨と砂が残った。

荒廃が大地を蝕み、文明を破壊する。

しかし、あらゆる生命が死を肌で感じ取っているにもかかわらず、人のみは、死の影に屈するをよしとしなかった。

荒廃から長い年月が過ぎ、人々の生活は少しづつ以前の状態に近づきつつあった。

□

漆黒の血を得て、唸りを上げる鋼鉄の心臓。その鼓動は大気を揺るがし、その衝撃を周囲に叩きつける。

人の鼓膜もまた然り。

「うるっさいわねえ……」

焦げ跡が豹柄のようになった毛布を乱暴に跳ね飛ばすと、ジャネット・ファン・レインはゆっくりと上体を起こした。

年の頃十七程の少女である。

背は標準より幾分高い。

長い金髪はまとめもせず、その青い瞳は眠気で曇っている。

ボロボロの赤いベストに白いシャツ。

褐色のハーフパンツは生地が油で少し黒くなっている。

起きたてのぼんやりした頭のまま、彼女は半眼で周囲を見回した。

床の上に散らかった大小様々な工具。

ところどころ錆びた、むき出しの鋼鉄の壁。

そういえば多少暗いと頭上を仰げば、数ある照明の内、小さな白熱灯だけが一つ、囁くように光を放っている。

頬を叩いて未だ機能しない脳を手荒に起こしつつ、ジャネットは宙

を仰いで考え込んだ。

確か…そう、晩遅くにたたき起こされて、それでエンジントラブルが起きたっていうからじいちゃんと一緒に長い間必死で直していたはず。

うん、間違いない。そこまでは。それで、ちょっと休めって言われて軽く眠るつもりで横になって…。

そこまで思い出し、左をふと見る。

巨岩の如き様相を呈した赤銅色のエンジンは、不調など知らぬ風で元気よく稼動していた。

エンジンは自動車程の大きさの筒が三つ束になったような形をしており、上層部には無数のパイプが刺さっている。

故障したのはエンジン下部。一人ギリギリ入れるかどうかという場所で、長時間やるには身体に負担の大きい箇所であった。

だからこそ作業途中にダウンしてしまったわけだが。

ジャネットは立ち上がり修理箇所を調べようとしたが、既にエンジンは相当熱を持っていて手を入れて調べることは不可能である。屈みこんで奥をのぞくと、パイプとパイプの間に僅かに見える隙間にはあるべきパーツがきちんと収まっていた。

「ってことは、じいちゃん、一人で直したんだ…。」

ジャネットはぼそつと呟き、よいしょと年寄りくさい掛け声で立ち上がると大きく伸びをした。

このエンジンルームは大人十人が横臥出来るほどの広さがあるが、

その半分をエンジンが占めている。

もともとエンジンルームではない所を改造して組み込んだために奥側のエンジンのところまで行こうとすれば梯子伝いに乗り越えなければならぬ。

ぐるりと周回できないのが面倒なところであるが、エンジンを修理する事態というのは基本的に短時間で終わるものではないため、移動経路を短縮しようが殆ど作業に影響はないのである。

揺れるパイプの群れと唸るエンジンを交互に見比べながら、ジャネットは轟音の中ぼんやりと考えた。

このエンジンの稼動具合を見ると、まず間違いなく通常出力で走行をしている。

つまり、修理は終了しているのであってこれ以上自分がここに居る理由はない。

それに駆動したエンジンは相当熱くなるし、現に部屋は非常に暑い。そもそも窓がないこのエンジンルームに入るときは、まずエンジンを落として、その後から換気扇のスイッチを入れさらに冷却装置を起動し、なおかつそれから数時間した後にようやく入ることが出来るのである。

つまり。

「ちよつとじいちゃん、私を残して何でエンジンつけるのよ!」

このままだと死ぬわこれ、とジャネットは慌てて散らばった工具をかき集め、脂くさい鞆に叩き込むとエンジンルームを飛び出した。

人が生きる上で日々の糧を得る手段は多々あれど、この緑のない荒廃した大地にあって人が生きていく手段は、僅か二つしかない。一つは交易、そしてもう一つは遺跡の盗掘、つまりロストテクノロジーの塊を発掘し、転売することである。

ある時を境に完全に崩壊したこの大陸の文明が、数十年前にどうか荒野を航行できる程度にまで技術を回復させて以来、崩壊を免れた他大陸の支援や、荒野に埋もれた崩壊前の施設の発掘によって科学技術は僅かづつながら以前の状態へ近づきつつある。

しかしながらいかんせん埋没物の風化が甚だしく、そして他大陸からの支援にも限度があるためまだまだ文明を復興させるには至らず、膨大な時間がかかるとされていた。

また、発掘したものを復元できる技術も整っていないため、未だ発掘、あるいは遺跡を探索して出てきたものに依存している状況が続いている。

発掘は基本手探りであるが、旧文明期に多用された特殊金属に反応するレーダー、その細長い形状からテイルレーダーと呼ばれているこの機械を掘り当てた者は、他の者に対して絶対的な優位を持って

行動が出来るが、レーダー自体はほとんど発掘されていないのが現状である。

多くの発掘業者が最優先で探し回っているものの、レーダー所有非所有の差はいかんともしがたいものがある。

ただ、レーダー本体の解析作業の末にかろうじて複製に成功はしており、完全に発掘待ちという状況ではないものの、その単価は驚愕の値段であり実際のところ遺跡の掘り出しのみで生計を立てられる発掘業者はほんの一握りである。

そして大概、成功している者達はレーダーと発掘された部品、出回っている既製品を組み合わせて巨大な移動車両を造る。

発掘初期の頃は、レーダー自体が巨大で移動に大変苦労したため、苦肉の策としてレーダーを組み込んだ車両を使って発掘を行っていた。

そして、いつしかにレーダーを所有する業者は皆巨大車両にレーダーを積む方式をとるようになり、現在の、レーダーを組み込んだ車両で何日も寝泊りしながら旅をし、発掘するという発掘屋の基本スタイルが出来上がったのである。

基本的な生活サイクルは、荒野を旅し、発掘しては点在する交易商や市で売り飛ばし、それを資金にまた発掘を続ける。

ちなみに車と言っても、実際にはちょっとした砦並みの大きさがある。

平均的なサイズで高さ十二メートル前後、底面積四、五百平方メートル以上である。

兵装をする者も居れば機動性を高めるために小型化する者、さまざまである。ただし、相当金がかかるので、前述のとおりレーダーを持つ、成功した一部の者しかこれらを所有することは出来ない。

発掘屋、また一般人の間で、これらの車はいつの間にか「グランドフォート『GF』」と呼ばれるようになっていた。

茹で上がるような熱気の渦から飛び出したジャネットを待っていたのは、早朝特有の張り詰めた冷気と、そして目の眩むような曙光だった。

外気の余りの冷たさに一つ身震いすると、鞆を足元に放り出し手すりに身を乗り出す。

「…普通に朝まで寝ちゃったわけか。」

風に絡まる髪を手で押さえつつ、ジャネットは目を細めてそう呟いた。

轟音を上げて疾駆するGF「ヴォルギール」は、鈍色の体軀に真っ赤な朝日をつけて、赤く荒廃した大地に砂煙を巻き上げ、轟音とともに疾駆している。

次第に目が光に慣れる。彼女の視界には地平線と、それを突き上げるように上る太陽。後は何もない、岩と砂と地平線だけの単純な光景。

「砂漠の海、か…。」

ジャネットはしばらく手すりにもたれかかっていたが次第に寒気を覚え、放り出した鞆を掴むとエンジン室脇の階段を上がり操舵室に

向かった。

操舵室では、祖父バルガスがパイプを咥え鼻歌を歌いながら、舵輪を握っていた。

「じーちゃん！ もうちよつとで煮物になるところだったじゃない。なんで私が居るのにエンジンに火入れたわけ？」

勢いよく鋼のドアを開けると、ジャネットはバルガスにそう食って掛かった。

「あのまま死神がお迎えにきたらどーすんのよ！」

「お前のような、じゃじゃ馬を好き好んで連れてく死神もおるまい。」

闊達に笑いながら、バルガスはもったいぶって鼻から煙を吐いた。

「じーちゃん…。」

「冗談じゃ。」

ジャネットのほうへ振り返ると、渋い笑みを作ってバルガスは再度煙を吐いた。

ジャネットは両親を早くに亡くし、地方都市からバルガスの住む辺境の村に住んでいたのだが、派手好きで抜群の機械技術の持ち主

だった祖父に懐くうちに彼の影響を受けることになる。

もともと祖父は発掘業者の組合、協会と呼ばれる組織の、それもGF所有者のみが参加を許される代表委員会に名前を連ねていた。

GFを所有していないにもかかわらずである。そんな祖父に次第に感化され、ついにジャネット十三歳の春、祖父とともに村を出る。

そして発掘屋を細々と始めたのだが、不思議なことにレーダー無し、協会の援助無しにもかかわらず祖父が掘り当てるものはどれも一生に一度引き当てるかどうかという、協会の定める発掘品ランクの最上位レベルのものばかりであった。

そしてついに、村を出てから一年半。祖父が発掘した凄まじい性能のエンジンを据えたGF「ヴォルギール」を駆って世界中を発掘して回るころには、祖父の縁故もあり超一流の発掘屋として、その名が知れ渡っていた。

「ほれ、エンジンのぶつとい音がすりや目が覚めるじゃろうと思っ
てな。」

「まあそうだけど。」

半眼でジャネットは祖父を見た。

「それに、毛布も持っていてやったんじゃし、お前が眠りこけた
あとに修理をしたのは、ワシなんじゃから。」

「あー、まあ、どうもー。」

なぜか感謝の感情は沸きあがってこなかった。

「終わってすぐ起こしてくれればよかったのに。」

大体、祖父の親切はどこかずれていた。

「熟睡しとるもんを起こすのは忍びないからのう。」

バルガスはそういつて、再度舵輪を握った。が、その際に彼が気まずそうに目を細めるのをジャネットは見逃さなかった。

「私がエンジンルームにいるの、忘れて起動したでしょ。」

バルガスはすがすがしい笑みを浮かべると、フロントガラスを遠い目で見つめた。

「うむ、エンジンは今日もすぐぶる上々じゃな。」

（昨日故障したばかりなんだけど）

それ以上の会話は無駄な気がして、ジャネットはため息をついた。

操舵室は船のそれと同じような構造であり、違うといえば操舵輪の代わりにレバーが二本とボタン各種、それにデッキ一面が相当域の視界を確保できるようガラス張りになっている。

操舵室自体の高さもあいまって壮大な景色を一望することが出来た。

ジャネットはフロントガラスへ向かう。眼下に広がる乾燥した大地と、盛大に湧き上がる土煙、飛び散る石礫。速度は確かに、いつも通りのようだった。

このヴォルギールのエンジンは、祖父曰く人生最大の発掘であるらしく、他のGFのエンジンを凌駕している。

調整も完璧で出力が非常に安定している上、他のエンジンの数倍の

出力は出る。

ここ最近販売されるようになったGF用エンジンは液体燃料を使用するが、発掘して手に入れる古代のエンジンはある特殊な鉱石を使う。

ヴォルギールのエンジンはどういうわけかレーダーと一体化した過去存在しないタイプのものであり、出力を上げてレーダーを起動すると感応値が跳ね上がって微細なものでも見つかるようになっていく。

通常はエンジンとレーダーは別々に動力を用意しなくてはならない為、祖父いわく非常に便利との事。

燃料用の鉱石だが、これは一塊あればしばらく間に合う。

ただ、少々高く交易場では宝石扱いのため安価で手に入るというわけにはいかないが、安定した産出量でどこの都市でも見かけられるため、金があれば補給は出来るというわけである。

祖父の自慢も納得のいく代物である。

「ねえ、じいちゃん。」

「なんじゃ。」

「そろそろさ、かき集めたものを売りに出さない？」

倉庫二つとも、もう空きがないよ、とジャネットが言うと、バルガスはバツがわるそうに頭を掻いた。

「本当ならば昨日のうちに着くはずじゃったんじゃがのう。この砂漠の先に昔からある交易場があつてな、そこで売りに出す。到着は昼過ぎくらいかの。」

水も足さんとならん、と呟くバルガスにジャネットは小さくため息をついた。

「前みたいに变なのにつつかからないでね。」

「馬鹿言え、あれはわしが悪いんじゃない、そのだな…。」

「変な女に散々飲まされた挙句、掘りだした物全部その女の言い値で売っちゃったじゃないの。次からは私が交渉に出るからね。」

むづ、と黙る祖父にジャネットは、じいちゃんは搬入の仕事だけお願い、と釘を刺した。

祖父は実際そこまで軽い人間ではない。しかしながら一月ほど前に立ち寄った町の酒場で、その場にいた女と意気投合し、挙句の果てに向こうの言い値、格安で発掘した資材を売ってしまったのである。酔いが醒めればもう手遅れ。女は消え、僅かな金と絶望、そしてジャネットの張り手が頬に残ったと言つ具合である。

「いーい？あと、全部売却してお金を金庫に保管するまで飲んじゃだめよ？」

「いーや、その辺は心配ない！」

渋い笑みを作るとバルガスは朗々と笑った。

「その市場にや古馴染みがいてな。奴さん、作業中に小型地雷に当たっちゃって以来、発掘業から足を洗って協会と発掘屋の仲介業者として生活してるんじゃが、なかなか信用できる男じゃ。そいつに全部任せるからの。」

笑顔で酒を飲むしぐさをする。

「ちゃっちゃんと飲みにいくぞい。」

そして祖父の笑顔は衝撃と共に床に沈んだ。

「まったくもう……。」

ほほに紅葉を浮かべて床に転がる祖父を見つめ、溜め息混じりにそう言う、ジャネットは首を振った。

「まあ、その人が信用出来るなら、いいんだけど。今回は前回以上にいいものが上がったんだから、半端な値段じゃ納得しないからね。」

「その点は心配ない。」

頬をさすり立ち上がると、バルガスは肩をすくめた。

「そもそも上がった物のいくつかは市場で全くといっていいほど出回ってない品じゃ。少なく見積もっても、並のGFが丸々一つ作れるだけの金が入る。」

安心しろい、と言うバルガスにジャネットは僅かに笑みを漏らす。

「まあ、じいちゃんがそこまで言うなら大丈夫かな。」

そうともそうとも、と頷きパイプに火を点ける祖父だったが、ふとジャネットを見る。

「そうそう、やっとまとまった金が入るからの、お前は何か欲しいものはないのか？」

突然の問いにジャネットは面食らった様子で、うーんと呟き小首をかしげて考え込む。

「特に欲しいものは、ないかなあ。…うん、特には。」

「服とか、飾りとか、別に遠慮はいらんぞ。」

今まで生活がギリギリじゃったからのう、と祖父は頭を掻きながら言った。

「いろいろ遠慮してたんじゃないのか？」

「ううん、そうじゃなくて…なんだろ、そういうものに興味を持てるような生活じゃなかったじゃない、ずっと。」

上りきった太陽に照らされる赤銅色の大地を見つめ、ジャネットは搾り出すように喋った。

「なんだろ…まあ、そんな深刻なことでもないんだけど、さ…。」

とそこまで言うと、ふと顔を上げ、あー！と叫ぶ。

「そもそも大体じいちゃんが散財するから私も物を買うお金がなくなるんでしょ？水のタンク買うからってお金渡したらいつちばん高いの買って！コンロとか去年からずーっとスイッチの絶妙な角度を保たないと火が出ないし、最近足回り悪いからって修理と基部交換お願いしたら借金まで作って！拳句の果てに…！」

立ち上がると、ずかずかとフロントガラスのほうまで歩いていき、

壁面のガラスのふたを開け、スイッチを押す。

数秒遅れて、振動と共に巨大な砲身が車体の正面にせり出して来た。

でかい。戦艦の主砲の数倍はあろうかというその大きさと重さに、ヴォルギールがバランスを崩し大きく前後に揺れる。

「ば、ばか、走行中に…。」

「こんなもんまで搭載しちゃって！」

揺れる車体、叫ぶジャネット。先ほど点けたパイプは二、三口味わっただけでもう燃え尽きようとしている。バランスを崩し床にしりもちをつくと、再度スイッチを押して砲身をしまうジャネットを見つめバルガスは頭を掻いた。

「すまんのう。勢いで買ってしまったのは反省しとるんじやが。」

「…わかってるわよ。まあ、なんだかんだで結局助けられたし。」
重い振動と共に再び車体に収まる砲身を見つめながらジャネットは椅子に座り込んだ。

この砲は祖父が貴重な発掘品六品を売却して購入したもので、実弾兵器ではない。発射されるのは極太の光の柱である。祖父いわく、発掘品の中で最古と言われる世代のものであるらしく、現在では失われてしまった魔術を科学で応用したもの、魔導工学という技術によって造られたものらしい。

そして実際、購入以後この砲は幾度か使用されている。
記念すべき第一回は、数ヶ月前に通過した遙か西の砂砂漠で、そこに生息する巨大な砂竜を粉々に吹き飛ばした。

尤も、砂竜の返り血で二週間は悪臭に苦しめられたが。

その他、滅多にいないがGFに乗った盗賊集団に目をつけられたときも、相手のGFとその取り巻きごと消し炭にした。

まさに切り札だが、全エネルギーをまわすため発射後は燃料の鉱石を補充しなければならない。

エンジンルームの冷却を待ってから補充作業に入るため、結果的には発射から一時間の間、一切行動できない。

故に使用のタイミングには細心の注意が必要なのである。砲弾より安上がりで祖父は胸を張っていたが、その重さで燃費は大分悪くなった。

「ま、私はいいわ。そんなに欲しいものはないし。」

「そうか、まあ、大金は入るから、何ぞ欲しければいつでも言え
ばいい。」

とそう言った瞬間、ふと祖父の目つきが変わった。

「お、そろそろじゃな。」

ほれ、あそこが分かるかとバルガスが指し示す方を見やると、地平線の影に巨大な岩が認められた。

「あそこ？」

「そうじゃ、あの岩山が目印でな。地下水脈に支えられとる町じゃ、あそこは。」

「…あそこなら、母さんの情報、見つかるかな？」

ふいに呟くジャネットの言葉に、どうじやろうな、と葉を詰め直したパイプを负荷しながらバルガスは返す。

「どの町でもアンナの消息は掴めんかったからのう。もう少し情報

があればいいんじゃない。」

ため息混じりに祖父は呟くと、懐にある写真を取り出す。

写真技術は比較的早く復旧した技術の一つである。

崩壊する前の時代はほぼ全てが魔法によって動いていた。何故それらが使えなくなったのかはわからないが、祖父に寄れば大災害によつて九割もの人口が失われ、同時に人は魔法を扱うことが出来なくなつたのだという。

それらを起動させるのは不可能だったが、旧時代には重要視されなかつた科学技術によつて人々は少しずつ以前の生活へ戻ろうとしている。

それでも代替技術で元に戻るにはあと五百年以上かかるとも祖父は言つた。

「この荒すぎる写真では知る者もわかるまい。十年も前の写真ならなおのことじゃ。」

もう少し早く写真が出来ておればのう、と祖父はぼやいた。

「…今嘆いても仕方ないじゃない。」

ジャネットは嘆息する。

幼少時に失踪した母、アンナは祖父に手ほどきを受けた腕利きの発掘業者であり、優秀な考古学者であつた。

父も発掘業者だつたが事故で他界し、引退していたバルガスにジャネットを預けたのが十年前。

そして彼女は収入を得る為、非法な盗掘業者の依頼を受け出かけたまま歸つてこなかつたのである。

特に何も言わず出発した彼女の手がかりは、父が生きていた頃に町に來た写真業者が撮影した家族写真。

あとはバルガスがアンナから聞き出した僅かな情報。

―長い仕事になるわ。そうね、半年くらいかしら―

―遠方よ。相手方からはGFで二週間と言われたわ。…内容は、埋没都市の発掘作業―

ふう、とため息をつく、バルガスはパイプに手を伸ばした。
輪を描く煙は窓からの風に揺らめき、薄れていく。

「あの町の名前は？」
ジャネットの問いに彼は静かに答える。

「ベラガナ。あそこは地下水が豊富でな、旧時代からの交易の要な
んじゃ。」

「交易の要、か。補給と売却で一週間はいるでしょ？」
「そうじゃな。あとまあ、アンナの消息も調べてみんとう。この
ベラガナも、わしらの町から丁度二週間程度じゃ。」

祖父の言葉にジャネットは、そう、と一言だけ言う。

探す前から落胆しているのかとバルガスが気を揉んだ瞬間、彼女は
両手で自らの頬を叩いた。

「よし！気合入れて探すぞー！」

杞憂じゃったのう、と安心する祖父の気持ちを知らず、ジャネットは一人氣勢を上げる。

と、軽く車体が揺れた後、車体の振動が変わる。どうやら舗装された道路に出たようだった。

「しゃべつとるうちにそろそろ内砂じゃ。ほれ、警備のもんが来るから手続きを頼む。」

ジャネットは祖父の所属している協会の会員証を背後の引き出しから引つ張り出すと、操舵室を飛び出す。

荒廃した世界は人口も少なく、統一国家もない為都市それぞれが小規模の国家として振舞っていた。
そのそれぞれ都市国家の治安維持能力の及ぶ範囲を内砂、範囲外を外砂と呼ぶのである。

外に出たジャネットを待っていたのは灼熱の日差しと温風であった。いつものこととはいえ慣れはすれど平気にはなり得ない。うんざりした表情で手すりにもたれかかりながら周囲を見ると、岩山とヴォルギールの丁度中間地点に車両が三台止まっていた。どうやらあれがベラガナの国境警備の人間だろう。

速度を落とすヴォルギールに揺られながら、ジャネットはまだ見ぬ町の情景を思い浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8809g/>

GRAND FORT

2010年12月9日05時31分発行